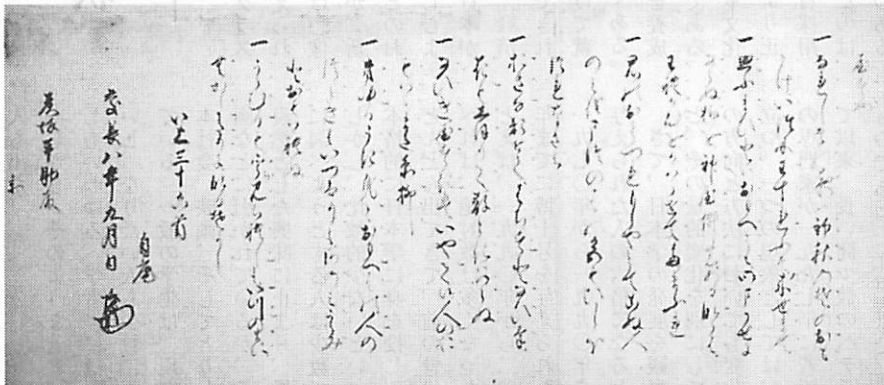
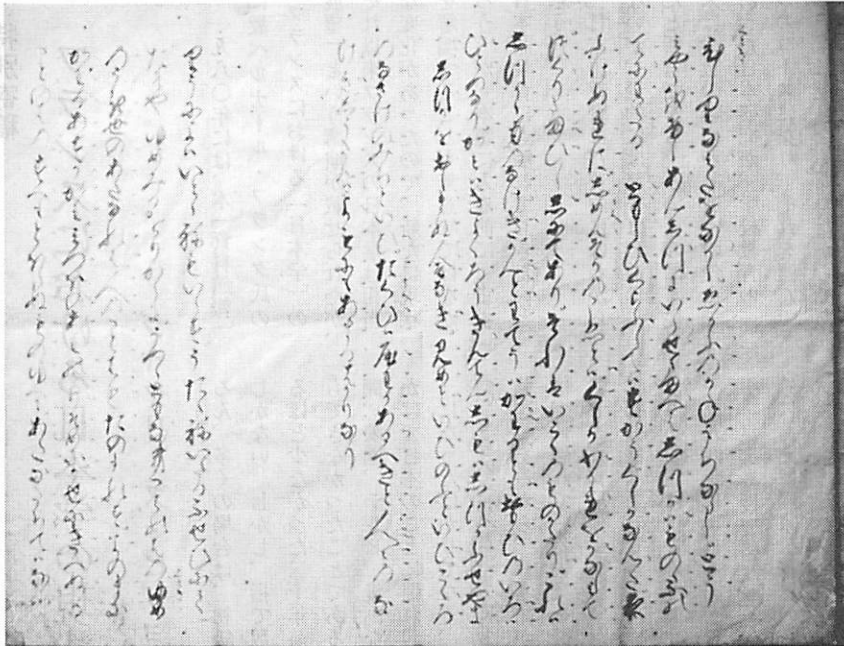


国文学研究資料館報

第55号

平成12年9月



(上) 幸若歌謡集 (下) 隆達節歌謡集 (6頁参照)

編集・発行者 国文学研究資料館
 東京都品川区豊町一丁目一六〇
 郵便番号 一四二八五八五
 電話 〇三—三七八五—七二三
 FAX 〇三—三七八五—七〇五一
 URL <http://www.nijiac.jp/>
 印刷 株式会社三協社

— 目 次 —	
フランスにおける日本学の現状	評議員等名簿……………15
ジャクリース・ピジョー……………2	彙報……………18
「右から御覧下さい」 松野陽一……………4	ばあくれいざつき (最初の一週間) 原正一郎……………21
新取資料紹介45: 中世歌謡資料三種 落合博志……………6	人事異動……………22
新ホームページのお知らせ……………7	利用者へのお知らせ……………23
文献資料部事業報告 新藤協三……………8	秋季学会開催一覧……………24
研究情報部事業報告 松村雄二……………10	集会等予告
整理閲覧部事業報告 整理閲覧部……………12	国際日本文学研究集会……………3
文庫紹介33: 大洲市立図書館 (矢野玄道文庫) 中野真麻理……………14	秋季通常展示・公開講演会……………5
	シンポジウム コンピュータ国文学……………20

特別寄稿

フランスにおける日本学の現状

ジャクリーヌ・ピジョー

一九八〇年には、本「資料館報」に故ベルナル・フランク氏の「フランスにおける「日本学」の展望」という講演が載せられたが、それ以来フランスの日本学は相当な変化があったので、新たに現状を説明することも無意味ではなからう。が、本題に入る前に、まず日本語教育にも触れておきたいと思う。

日本語教育は、質的にはわからないが、量的には驚くほど進歩したと断言できる。というのは、従来は少数の「変わり者」の使命であった日本研究が、学校教育の一つのコースになり、それを選んでも異常に見えなくなったからである。「フランス日本研究学会」の会報(6号)によると(この学会が一九九〇年にできたこと自体が新時代の特徴であるが)、一九九五年には、日本語を教えている国立・私立学校(中学を含めて)の数は、百十八に達している。もち

ろん、多くの場合は、初級クラス

しかない。しかし、指で数えられるほど少なかった三十年前は想像もできなかったことであるが、新聞、映画、テレビ、漫画などのおかげで日本のことに慣れ親しむようになったばかりでなく、日本が(いくら不景気といつても)経済強国であるから、日本語ができれば、皆恐れている失業を避けて就職できると思っているのである。

政府も日本語のできる人材を養成する必要性に目覚めたようである。一九八四年に「日本語・日本文化中・高等教授資格試験」(より正確に言えば国家公務員の教員採用試験) *certification* を制定したのはそのためであり、日本語科のある大学や国立東洋言語・文化研究所(東洋語学校)で講座をどんどん設けていることも同じ政策を表わしている。おかげで学生のレベルは著しく高くなり、会話・作文・翻訳の達者な卒業生はその後何十

人も出た。

しかし、そのような若者は必ずしもいわゆる「学者」にはならないし、なりたい人も少数に限られている。一般の学生は、現在の日本社会、映画、そしてとりわけ漫画などに引かれていくが、それは漠然とした興味に止まり、徹底的に調べようとする人は少数である。しかし、比較的少ないといつても、本格的に日本学を身を投じる人もどんどん出てきて、前の世代に比べれば、絶対数は多くなった。たとえば、一九九〇年から二〇〇〇年までに博士号を与えられた人は、一九七〇年から一九九〇年までに与えられた人の六倍になると思う。

さて、日本学の発展を観察すると、その量的変化を別にして、その方向と方法においても変化が目立つ。一つの現象としては、二人の専門家が一九九七年に若死にしている、長い間少数のベテランのものであった江戸時代の研究は、今は何人かの若手のおかげで榮えているということ。思想・宗教組織・社会史・文学(西鶴から漢詩まで)について、緻密な研究がいくつか出ている。

もう一つは、つとにして日本美

術に目覚めたゴンクール兄弟やモネの国としては思いがけないことであるが、美術の専門家は今まで是一世代に一人くらいであった。それが、最近では絵巻物から葦手まで、明治時代の装飾美術から第二次世界大戦の戦争画までというテーマを選ぶ研究者が現われてきた。なお、古典文学研究も盛んであり、その出版は近代・現代文学のものより多い。

もう一つの現象として取り上げられるのは、仏教学の復活である。故B・フランク先生の立派な弟子(五十代以上の学者)はいるのである。四十代・三十代は暗黒時代に当る。しかし、今は少くとも四人熱心な若手が出てきたので、後継者の心配はなくなった。

なお、人数が多くなって、お互いの研究テーマが一致する場合も出はじめているためか、フランス人には昔から苦手な共同研究も行なわれるようになった。たとえば、民衆文化や京都史や日本人の容器の思考などをテーマとする様々なグループができた。

最後に、日本学の専門誌。一九九〇年代までにはなかったもので、東洋学関係の専門誌や、一般誌、

または国際誌に頼るほかはなかったが、ここ十年の間に三つもできた。Cipango, Ebisu, Darumaであるが、それぞれ八号、二十一号、七号と回を重ねており順調に進んでいるようである。

以上、めでたいニュースばかり並べて、自己満足と言われる恐れがあるが、西洋の諸国における日本学や日本におけるフランス学に比べればまだまだであるとの意識はある。しかし、やはり、遅れをやっと取り戻したことは嬉しいと言っても許してもらえないのではないだろうか。

* * * * *

ビジョー氏はフランス・パリ第7大学教授。平成元年度当館客員教授。最近の御著書に「物尽し—日本のレトリックの伝統」(平凡社、一九九七)とQuestions de poésie japonaise (Presses Universitaires de France, 1997)があります。昨春秋、コレージュ・ド・フランス日本学高等研究所と当館との学術交流協定に基づき来日されたのを機にご寄稿をお願いしました。なお、氏は本年春の叙勲で勲三等瑞宝章を受けられました。

第24回国際日本文学研究集会

テーマ：境界と日本文学—画像と言語表現—

平成12年11月16日(木)・17日(金) 於国文学研究資料館

第1日 受付12:30より、開会13:00

*研究発表(13:10~)

第1セッション 説話・物語の画像化

浦島伝説における画像の諸問題

林 晃平(苫小牧駒澤大学)

説経節「小栗判官」の成立再考

松尾 剛次(山形大学)

画像は千の言葉に匹敵するか—漫画にみる「源氏物語」—

リン・ミヤケ(ボモナ大学)

第2セッション 人物画の世界

フリーア美術館蔵高尾大夫図について

鈴木 淳(国文学研究資料館)

異人種への視線—近代日本の人種観の誕生まで—

斉藤 愛(日本学術振興会特別研究員)

入宋僧の影像と真蹟

王 麗 萍(大谷大学大学院)

—旅行記「参天台五臺山記」を史料として—

百人一首の絵画化—享受と解釈—

ジョシュア・モストウ(プリティッシュ・コロンビア大学)

*レセプション(17:45~)

第2日

*研究発表(10:30~)

第3セッション 越境する画像

雑誌メディア・小説・映画の交渉に見る〈他者〉の変容

趙 美 京(筑波大学大学院)

—大江健三郎の「叫び声」から大島渚の〈絞死刑〉に至るまで—

矢野龍溪「経国美談」の空間特質

表 世 晩(神戸大学大学院)

所謂「人生道中図」とその変容

腮尾 尚子(お茶の水女子大学大学院)

挿絵の独立、先行性—黄表紙のケース— ハルコ・イワサキ(カリフォルニア大学サンタ・バーバラ校)

*講演(14:00~16:15)

「行燈の中に座っていた狐」など—文学と美術のはざま—

小池 正胤(東京学芸大学名誉教授)

中国資料に描かれた日本人像

王 勇(浙江大学/当館客員教授)

参加方法：氏名・住所・現職・研究分野・レセプション参加希望の有無をお書きの上、はがきまたは封書でお送り下さい。申込書の形式は自由ですが、当館ホームページ(<http://www.nijl.ac.jp/>)掲載のものをお使いになると便利です。なお、発表要旨もホームページに掲載しております。

参加費：無料。

レセプション参加費：1,000円程度(当日お支払い下さい)

申込・問い合わせ先：142-8585 品川区豊町1-16-10 国文学研究資料館研究情報部情報資料室内

国際日本文学研究集会事務局 03-3785-7131 内403、408 fax 03-3785-4455

「右から御覧下さい」

松野陽一

五月二十六日の国立大学長・大学共同利用機関長等会議で、独立行政法人への移行の方針が文部省から提示された。通則法そのままの適用ではなく、特例法などによる研究・教育機関の特性の確保が配慮されているが、具体的には、

立場から、四委員会に対応する部会を作って検討に入ったところである。館内でも後述する諸問題と併せて議論を進めて行きたい。

本省に設置される調査検討会議で平成十三年度内に結論が出されるという日程も示され、大学共同利用機関は国立大学に準じて同時移行することも確定した。準備不足のまま「速やかに移行」の可能性のあつた時に比べれば、多少の時間的猶予が生じたわけである。調査検討会議には、組織業務、目標評価、人事制度、財務会計制度の四委員会が設けられ、各界から各十五人の委員が選定されるとのことであり、共同利用機関からも四委員会に一人ずつ参加することになつている。共同利用機関としては、国立大学との関係にも配慮しつつ、法人像の基本理念について独自の見解を持つべきであるとの

二十七万点のカード、十六万点のフィルムの集積という成果をもたらし、世界中の研究者の利用に供することを可能にしたわけであるが、このシステムを良好に維持し、充実させて行くためにも、本館独自の院生教育機能は強力な役割を担って行くことにならう。

本学資料を東アジア書籍圏に定位して活用できるようにして行くことを目標に、従来とも先端的な開発に努力してきた電子情報化の積極的な導入、前記した地道な資料調査・収集の意志の継続を柱として、画期的な資料の活用可能な組織に再編して行きたい。当然のことながら、前に述べた総研大のカリキュラムもこの内容に連動しているのである。

総合研究大学院大学への加入問題は諸般の事情から一年遅れることとなつたが、文化科学研究科に日本文学研究専攻として参加すべく準備を進め、先方に審議をしていただいているところである。日本文学研究の後進の育成は既成の大学院に依拠してきたのであるが、全国的な大学改革と連動した国文学科改変の動向を勘案し、且つ、新領域開拓の気運を見据えると、独自の研究者養成の時期が到来したと判断している。北海道から沖縄にいたる各都道府県に、日本文学の講義を担当している国公私立大学の現役教員を毎年約百人調査員として委嘱し、所蔵者の許で写本本一点ずつ書誌カードを作成して貰うという、大学共同利用機関ならではの当館の資料調査・収集システム（調査員制度）は、

立川移転問題は、国立極地研究所・統計数理研究所との三機関共同の予算要求に、基本設計の準備に関する予算措置がなされて、平成十二年度から具体的な段階に入った。当館としては設計に、共同研究機関の機能が充分反映するよう、組織改変を盛りこんだ平成十三年度概算要求書を提出したところである。改組の骨子は、現行の「室」（小講座）制から「部門」（大講座）制への移行と電子情報館化、事務機構の一元化が三本の柱である。「室」から「大部門」への移行は一見、前記大学改革と軌を一にするようであるが、写本書誌学・版本書誌学・明治書誌学といった「物としての書籍の研究」に専化する改変であり、中世注釈書群、日本漢文学資料の如き、学際性・国際性を必要条件とする研究部門の設定への改革である。日

この方向性は決して短時日に思いつかれた企画なのではない。三十年に及ぼんとする大学現任教員（館外の調査員・収集計画委員）の提言の集積に拠るものであり、また、特定研究の始発から六年半の館員の基礎努力に拠つて完成した「日本古典籍書誌学辞典」から生み出された結論でもある。

しかしながら、現今の財政状況は厳しく、改革案がどこまで容れられるか、実現困難な結果も予想しておかねばならない。即ち、現行の組織のままでの移転計画も進める必要があるわけである。前記の将来計画への移行を含み込んだ現組織での移転、一世紀先（調査・収集事業の経験を以てすれば決して非現実的な長い時間尺度で

はない)の国文学研究資料館の姿を想定した設計構想を短時日の中に打立てねばならない。一日一日、石を積みよる地道な調査・研究の場であると同時に、広く国内外の研究者が参加して、自由に刺戟的な発想が生れ続ける場ともなるように、この際館員諸氏の渾身の努力を期待するところである。

我が国千二百年の古書籍全体を悉皆調査研究し、利用に供するという百年掛かりの地味な基本事業に従事することに、われわれは誇りを持って立ち向い、学術的且つ社会的使命感を強く意識しているものであるが、現実離れの独善的な存在になることは厳に戒めて行かねばならない。

近時一刻、中堅の建築家と談議の機会があった。一線クラスの実力者だけに刺戟的な話題を楽しむことができたが、たまたま地方都市の古書肆で入手したばかりの和本数点を示すと、直接手にすることは初めてという。早速、書誌学入門。写本版本の差から洋書との装丁の違い、書架の収蔵方法の相違に及ぶと、流石専門家、美術館展示での観客の動線にまで話が進んだ。右綴じ冊子本でも、卷子本

でも右縦書き書籍の本は、展示の場合、右からの動線が基本とならねばならない。近頃の美術展ではしばしば体験するところであるが、絵巻や手鑑が展覧してある場合に、当然右から見て行くと人の流れと廻うことになって難渋することが多い。無理からぬことで、展示順が左からになっていて、図録やイヤホンガイドと連動しているために生じている流れなのである。

「源氏物語」第二回(九月二十九日開催)にあわせ、「源氏物語」をテーマに行います。

日時 九月二十六日～十月十三日(土日祝は休館) 九時半～十六時半
会場 国文学研究資料館二階展示室
来館自由・入場無料

「源氏物語」の成立から享受までを、当館所蔵資料を中心に展示致します。なお、九月二十六日から二十九日の四日間に限り、特別展観として、宮内庁書陵部所蔵青表紙本「源氏物語」を併せて展示致します。多数の皆様のお来観をお待ち致します。

秋期通常展示のお知らせ

「源氏物語」とその前後

平成十二年秋期通常展示は、古典連続講演「岩佐美代子の語る『源氏物語』」第二回(九月二十九日開催)にあわせ、「源氏物語」をテーマに行います。

日時 九月二十六日～十月十三日(土日祝は休館) 九時半～十六時半
会場 国文学研究資料館二階展示室
来館自由・入場無料

「源氏物語」の成立から享受までを、当館所蔵資料を中心に展示致します。なお、九月二十六日から二十九日の四日間に限り、特別展観として、宮内庁書陵部所蔵青表紙本「源氏物語」を併せて展示致します。多数の皆様のお来観をお待ち致します。

秋期公開講演会のお知らせ

明治文学の創生と展開

平成十二年秋期公開講演会は、明治文学をテーマに行います。

日時 平成十二年十一月二十一日(火) 十三時半～十六時半
会場 国文学研究資料館大会議室
講師・演題

(政治)と女 お茶の水女子大学教育学部助教授 菅 聡子氏
立志のゆくえ 学習院大学文学部教授 十川信介氏
定員先着一五〇名・聴講無料

公開講演会に合わせて、展示「明治二十年前後の文学」(十一月十三日～十二月一日)を行います。皆様の御来聴と御来観をお待ち致します。

新収資料紹介④

中世歌謡資料三種

近年当館の所蔵となった中世歌謡関係の写本三種を紹介する。
鳥養宗断節付謄本「忠教」

卷子一軸。紙高17mm、紙幅47mm程の鳥の子紙を十枚継ぐ。紺表紙、外題なし。内題「忠教」。末尾に

「依薄田小四郎殿尊命染患ノ筆報机右畢他見有其ノ憚者歎為恐、沙弥宗断（花押）」の奥書があり、天正〱慶長初年に「車屋謡本」と通称される数多くの金春流謡本を製作した鳥養宗断の自筆自章本と知られる。車屋謡本は百番本四種・百二十番本一種を始め相当数が現存しているが、本文を宗断が執筆したことが明記されるものは、ほかに天正十六年七月の卷子本「湯屋」があるのみであり、その点で貴重すべき一本と言える。

奥書に年紀がなく書写年代が不明であるが、車屋謡本には例のない卷子装を採ることや同音部分を原則的に「同音」と記す点の共通性などから、卷子本「湯屋」と同時期の天正末年頃と見て大過なかるう。詞章の一部に「仏果を縁（得ん）そ」のような不適当な文

字遣いが見られることも、比較的早い時期に製作されたことを思わせる。宛先の薄田小四郎については、織田信長や豊臣秀吉の配下に薄田姓の人物が何名か確認され、或いはその同族であろうか。

幸若歌謡集（平出家旧蔵本）

364mm×259mm程の特大本一冊。斐紙袋綴、紙数十二丁。後補緑色表紙中央に「まいの本」、左肩題簽に「舞の本」と墨書。冊初に「平出氏書室記」の印記があり、名古屋の蔵書家平出家の旧蔵である。内容はいわゆる幸若歌謡集の一種で、「爰搜」「築島」「静」「大織冠」「夜討曾我」「八島」「張良」の七作品から抜いた十二曲と、独立の祝言曲「山科」「老人」の計十四曲を収める。なおいずれも曲名は書かれていない。

幸若歌謡集は現在不明も含めて二十数本が従来知られており、その内では慶長十五年および十六年の幸若小八郎安信節付本が最も早い。当該本は慶長初年頃の書写かと思われ、それらに先立つ幸若歌謡集の最古の伝本となる。

奥書を欠き素性が不明確であるが、詞章の上で大頭系との相違が目立ち、幸若系に属すると考えられる。ただし弥次郎家本とは異なり、相対的には毛利家本などと近似するものの、それらとの間にも詞章・節付共に無視し得ない相違があり、系統についてはなお検討を要する。また節付において、他本に「しほる」とある所に当該本は「クル」を用いることなどが特色として指摘され、詞章の性格と併せて考えるべき点であろう。

隆達節歌謡集（慶長八年九月三十日六首本・年代不詳二十九首本）

卷子一軸。改装布表紙、外題なし。紙高270mm、紙幅400mm程の楮紙を十枚継ぐ。途中第六紙に後掲の奥書があるが、ここまでの部分とそれ以下では裏打の料紙・方法とも異なっており、本来別々のものを貼り継いだことは明らかである。前半は「初歌集」の内題があり、三十六首の歌謡を連ねた末に、

「以上三十六首ノ慶長八年九月日自庵 隆達（花押写）ノ彦坂平助殿ノ参」の奥書がある。後半は内題・奥書ともなく、二十九首の歌謡（草歌）を列記する。

当該本は必ずしも新資料ではない

く、内容自体は愛知県立大学蔵大正八年石田元季氏写本やその転写本によって知られていたものである。従来は、途中にある慶長の奥書を全体に及ぼして「慶長八年九月六十五首本」と呼ばれてきたが、前半と後半は本来無関係であり、それぞれ「慶長八年九月彦坂平助宛三十六首本」「年代不詳草歌二十九首本」として別箇に扱うべきであろう。

石田氏写本は吉川親方氏蔵本（現所在不明）の影写であるが、漢字の当て方や仮名字体が当該本とはかなり違っており、親本が転写の際改変したものかと推測される。なお石田氏写本では、前半部の奥書に宛先の彦坂の名が何故か書かれておらず、当該本によりそれが初めて知られたことになる。

当該本は前半・後半とも隆達自筆本の忠実な写しと見られ、資料的には自筆本に準ずる価値を持つ。

（以上の三本は、館報48号・50号に紹介の「宗安小歌集」および早歌資料などと共に、今年度刊行の国文学研究資料館影印叢書「中世歌謡資料集」に収録する。）

（文献資料部助教・落合博志）

ホームページ (<http://www.nijl.ac.jp/>) が新しくなりました。

★は更新、◎は新着
--08/23--
◎「催し物の案内」→「国際
日本文学研究集会」にプロ
グラムと発表要旨を掲載

!!8月26日14時～16時前後、停
止



国文学研究資料館

文部省 大学共同利用機関

閲覧利用案内
データベース
催し物の案内
国文研案内
当館研究者のページ
学会情報

〒142-8585
東京都品川区豊町 1-16-10
TEL:03-3785-7131
FAX:03-3785-7051
問い合わせ先一覧

[当館トップページへのリンクはご自由にどうぞ]

内容は以下の通りです。問い合わせ先のメールアドレスは「問い合わせ先一覧」をクリックして下さい。

- * **閲覧利用案内** 当館および附属機関である史料館所蔵資料の閲覧の案内
- * **データベース** 日本古典文学作品DB (日本古典文学大系全100巻を収録)
国書基本DB (国書総目録補訂版・古典籍総合目録の書誌情報)
近代文献画像DB (当館が撮影収集した近代文献の全ページ画像)
史料館収蔵史料 (収蔵史料概要DB、武田家文書・二条家文書の暫定版DB)
二十一代集・絵入源氏物語 (原本テキストDB)
演能記録DB・連歌作品DB
当館所蔵図書雑誌目録 (OPAC)
当館所蔵和古書目録
当館所蔵マイクロフィルム目録
当館所蔵国文学論文目録
〔ほかに人物画像DB・吾妻鏡を実験公開中 (国文研案内/組織/研究情報部/データベース室からアクセス)〕
- * **催し物の案内** 公開講演会・古典連続講演・国際日本文学研究集会・シンポジウムコンピュータ国文学
展示 (過去の展示を「ヴァーチャル展示」として画像により公開中)
大学院特別共同利用研究員・夏季原典講読セミナー・史料管理学研修会・共同研究の募集
- * **国文研案内** 地図・組織・出版物・研究者紹介・要覧・関連サイト・史料館案内
- * **当館研究者のページ** 当館研究者による個人研究の公開
- * **学会情報** 国文学関連学会要覧・国文学関連集会等の日程および詳細プログラム

文献資料部事業報告

新藤 協三

平成十二年度の国文学文献資料の調査収集事業は、五月十八日の収集計画委員会の議を経て、五月二十五日の国文学文献資料調査員会議(総会)において具体的な打合せを行ない、例年どおり順調に進んでいる。

昨年度は明治期資料の調査に携わる調査員のみ午前中から出席したが、今年度は古典分野の調査に携わる調査員ともども午後から参会し、パソコンやデジタルカメラを使用して行なう明治期資料の調査・収集方式を、従来の古典分野にも取り込むことの是非なども含め、活発な意見交換がなされた。従来の方式と新方式とをいかに調整してゆくか、この問題は今後しばらく継続する課題となろう。なお、今年度の総会では、COE外国人研究員王勇氏(浙江大学日本文化研究所長・教授)による講演「書籍の道」も三年ぶりに行なわれた。

当館の調査収集業務は調査員の

方々の御協力を得て、年間目標を調査七千点以上、収集五千点以上を目指して行なわれるが、現在まで調査点数二十六万四千九百点余、収集点数十五万三千六百点余に及んでいる。

*平成十一年度国文学文献資料調査・収集の概況

一、調査

平成十一年度は、本年三月末までに一七八箇所在所蔵資料一、六九八点を調査した。

北海道・東北地区(順不同・敬称略、一部省略。以下同じ)

北海道教育大学附属図書館(札幌校)・伊達市開拓記念館・八戸市立図書館・弘前市立図書館・東北大学附属図書館(狩野文庫)・仙台市博物館・仙台市民図書館・山寺芭蕉記念館・山形大学附属図書館・山形女子短期大学附属図書館・酒田市立光丘文庫・米沢市立米沢図書館

関東地区

茨城大学附属図書館・筑波大学附

属図書館・観世文庫・東京芸術大学附属図書館(脇本文庫)・宮内庁書陵部・平沢威男(国立極地研究所長)・三井文庫・東京大学文学部国文学研究室・東洋文庫・東京都立中央図書館(東京誌料)・尊経閣文庫・横浜開港資料館

中部地区
新潟大学附属図書館(佐野文庫)・糸魚川市歴史民俗資料館・柏崎市立図書館・鶴岡文庫・山梨県立図書館・松代宝物館・磐田市教育委員会・浜松市立賀茂真淵記念館・三島市郷土館(勝俣文庫)・名古屋市鶴舞中央図書館・名古屋大学附属図書館(岡谷文庫)・名古屋市蓬左文庫・中京大学図書館・大須文庫・名古屋博物館・尾鷲市立中央公民館郷土室

近畿地区
夢望庵文庫・京都府立総合資料館・京都大学文学部(頼原文庫)・立命館大学附属図書館(西園寺文庫)・陽明文庫・蘆庵文庫・瑞光寺・京都市某家・京都国立博物館・天理大学附属天理図書館・郡山城跡柳沢文庫保存会・宝山寺・大阪天満宮御文庫・大阪女子大学附属図書館・玉津島神社・田辺市立図書館・濱口博章・

青山歴史村
中国・四国地区
鳥取県立図書館・島根県立図書館・島根大学附属図書館・太鼓谷稻成神社・ノートルダム清心女子大学附属図書館・津山郷土博物館・広島大学附属図書館・専徳寺・山口大学附属図書館(棲息堂文庫)・萩市立図書館・香川大学附属図書館(神原文庫)・鎌田共済会図書館・総本山善通寺・愛媛県立図書館・大洲市立図書館・徳島県立図書館(森文庫)・高知県立図書館(山内文庫)

九州地区
柳川古文書館・佐賀大学附属図書館・祐徳稲荷神社(中川文庫等)・長崎大学附属図書館(経済学部分館)・諏訪文庫・肥前松平文庫・松浦史料博物館・長崎県立対馬歴史民俗博物館・熊本市立図書館・臼杵市立臼杵図書館・杵築市立図書館・佐伯市教育委員会・竹田市立図書館・都城市立図書館・琉球大学附属図書館

近代
函館市立図書館・八戸市立図書館・弘前市立図書館・筑波大学附属図書館・早稲田大学図書館・山梨大学附属図書館(近代文学文

庫)・信州大学附属図書館教育学部分館・上田市立図書館(花月文庫)・名古屋市蓬左文庫(雑賀重良旧蔵書)・立命館大学附属図書館・大阪府立中之島図書館・和歌山大学附属図書館(紀州藩文庫)・南方熊楠邸保存顕彰会・神戸大学附属図書館(住田文庫)・高知市民図書館(近森文庫)・高知県立牧野植物園(牧野文庫)・香川大学附属図書館(神原文庫)・佐賀大学附属図書館・祐徳稲荷神社(中川文庫等)
海外
ベルリン東アジア美術館・ナーブルステク博物館・プルベラー家・キオソーネ美術館・ポドメール図書館・ブラハ国立美術館・オーストリア国立図書館・故宮博物院圖書文献館

近代は平成十年度から開始した調査、海外は文部省科学研究費補助金による調査である。

二、収集

本年三月末までに七〇箇所所蔵資料四〇五二点を収集した。

北海道・東北地区

八戸市立図書館・弘前市立図書館・盛岡市中央公民館・仙台市民図書館・酒田市立光丘文庫・初瀬

川文庫
関東地区

茨城県立歴史館・筑波大学附属図書館・宮内庁書陵部・法政大学音楽研究所(鴻山文庫)・東洋文庫・東京都立中央図書館(特別買上文庫)・尊経閣文庫・東京大学文学部宗教学研究室・平沢威男(国立極地研究所長)
中部地区

新潟大学附属図書館(佐野文庫)・糸魚川市歴史民俗資料館・黒川村立公民館・山梨県立図書館(甲州文庫)・上田市立図書館(花月文庫)・上田市立図書館(花春文庫)・諏訪市図書館・名古屋市蓬左文庫・愛知県立大学附属図書館・大須文庫・新城ふるさと情報館(牧野文庫)
近畿地区

正教蔵文庫・京都大学文学部(類原文庫)・京都府立総合資料館・蘆庵文庫・陽明文庫・郡山城史跡柳沢文庫保存会・大阪天満宮御文庫・濱口博章・青山歴史村

中国・四国地区

鳥取県立図書館・ノートルダム清心女子大学附属図書館・光藤益子・三原市立図書館・益田家・鎌田共済会図書館・総本山普通寺・

大洲市立図書館
九州地区

祐徳稲荷神社(中川文庫)・肥前松平文庫
近代

八戸市立図書館・弘前市立図書館・南方熊楠邸保存顕彰会・高知市民図書館(近森文庫)・祐徳稲荷神社(中川文庫等)

*平成十二年調査収集計画

本年度は、調査一三九箇所(近代・海外を含む)九〇三〇点、収集六六箇所(同)五二三〇点を目標として、調査収集業務を開始した。その内、輪王寺天海蔵をはじめとする六箇所の新規調査、願教寺以下一〇箇所の新規収集が含まれている。

*海外資料の調査・収集

本年度は、プルベラー家(ケルン)・キオソーネ美術館・オーストリア国立美術館・オーストリア応用美術館等の、海外科研究費による調査が予定され、ソウル大学校図書館本等の収集が予定されている。

*第五文獻資料室

本年度は客員教授として明治大学原道生教授が着任した。併任助教は、前期は奈良女子大学大谷俊太助教、後期は愛媛大学福田

安典助教。それぞれの専門分野に基づいて、文獻資料部の書誌学的研究や調査収集業務に参加していただいている。

*国際研究室

昨年十二月まで在任したステイブン・カーター教授(カリフォルニア大学アーバイン校)の後を承けて、四月から九ヶ月間、ワシントン大学アダム・カーン助教が着任、「近世後期の戯作研究」のテーマで研究活動に従事している。この外、COE外国人研究員として、四月から一年間浙江大王勇教授も着任した。

*その他

第四文獻資料室のロバート・キヤンベル助教が転出した後を承けて、四月から斎藤希史助教が着任した。非常勤研究員として新たに山本良氏が採用になった外、リサーチ・アシスタントは五月女肇志氏(東京大学大学院在籍)と田中亜紀子氏(法政大学大学院在籍)とが新規に採用されたが、研究支援推進員・事務補佐員は昨年度と変わりが無い。「調査研究報告」第二十一号は目下編集集中である。(文獻資料部長)

研究情報部事業報告

松村雄 二

立川美彦部長が退官、後任に松村雄二が就いた。

情報資料室

堀川貴司助教授が着任、松村が併任になった。

第二十三回国際日本文学研究会を、十一月十八、十九日両日にわたって開催し、近年にない充実した内容が得られた。参加者は一〇七名（うち海外より五一名）。本年度は特集として「境界と日本文学―翻訳とその周辺―」のテーマを設けた。研究発表者九名のうち八名の発表はこのテーマに関するものであった。招待研究発表者はカナダ・アルバータ大学のソーニャ・アンツェン教授と、タイ・チュラロンコン大学のカンラヤニ

ー・シタスワン助教授、公開講演は「露伴の時代―日本近代文学における翻訳とその周辺をめぐって―」の表題で、北海道教育大学の潟沼誠二教授、「題詠の翻訳―順阿の歌をめぐって―」の表題で、

カリフォルニア大学アーバイン校のステイブン・カーター教授が行った。なお第二十二回の会議録を十月に、第二十三回の会議録を三月に刊行した。

この他、新聞掲載の国文学関係記事の収集、年二回（九月・三月）の館報の発行を例年どおり行うとともに、新たに、学会等国文学関係の催事の情報収集とホームページによる発信を開始した。

情報分析室

本報告は平成十一年度分であるが、前回報告（第五十三号）で予告したように、当年度は「国文学年鑑」の刊行が平成十二年七月にずれ込んだ。そのため七月時点までの報告とする。

「国文学年鑑」平成十年版の編集を完了し、平成十二年七月に刊行した。主要項目の収載件数は、次のとおりであった。

◇雑誌・紀要・論文集・新聞所載
論文数 一二、三三四

- ◇学会一覧数 四一
- ◇学会研究発表一覧数 七四七
- ◇指定文化財数 一六
- ◇平成十年度文部省科学研究費等交付数 六一一
- ◇受賞一覧数 八〇
- ◇計報 三五
- ◇単行本一覧数 二、七五七
- ◇収載雑誌紀要一覧数 一、一八四

- ◇翻刻複製作品一覧数 八七五
- ◇執筆者索引数 一〇、一五八

頁数は前年度（平成九年版）より六二頁増の九一頁。これにもない販売価格は前年より若干値上げせざるを得ず一一、八〇〇円である。

ここ数年三月に完成してきた「国文学年鑑」が新入力システムの開発・導入により三ヶ月あまりの遅れをみての刊行となった。この遅れは徐々に回復していく計画である。ただ近年の予算緊縮の状況下、予算は許されないだろう。

当館では本年度中に、従来の大型計算機を撤廃し、ダウンサイジングが予定されている。これにもない当室では、一年間のずれを伴って実施されていた「国文学年鑑」編集業務と「国文学論文目録

データベース」作成業務との一本化を行う。同時作成システムの開発は、ほぼ完成に近づきつつある。「国文学論文目録データベース」のデータを、論文の発表時に近づけるリアルタイム化は、当室の懸案である。発表されてから少なくとも半年後には、当該論文がデータベースに搭載されていることを目標とし、空白期をなるべく少なくしたいと考えている。

また「国文学論文目録データベース」の検索を簡便化するためのシステム開発準備にかかっている。これによって、従来は必ずしも簡単とはいえなかった利用方法の簡便化を図りたいと考えている。

新検索システムによるリアルタイム化された「国文学論文目録データベース」は、十二年度試行実験、十三年度中公開を目標として努力を重ねている。冊子体「国文学年鑑」の編集刊行は今後も続けていく予定だが、「国文学論文目録データベース」の充実と検索の簡便化に伴い、図書館などでは冊子体の利用からデータベースの利用に切り替えることを、利用者に助言してほしいと希望している。なお、前回報告に掲載した「国

文学年鑑」平成九年版の「学会研究発表一覧表」に誤りがあった。「四一五」は「七一五」の誤りである。おわびして訂正します。

データベース室

伊藤鉄也助教授が着任した。

室創設以来の事業である国文学論文目録データベースは、平成九年のデータ（二二、一二二件）を追加搭載した。これで全データは約三〇九、〇〇〇件となる。この平成九年のデータの追加搭載をもって、国文学論文目録データベースの仕事はすべて情報分析室に移管される。データベース室は、システムのな実験は続けることになるが、年々のノルマとしてはこの大項目は消えることになる。ご支援くださった様々な立場の方に、心より御礼を申し上げます。

国文学論文目録データベースに代わって、データベース室の事業の中心になったのは、原本テキストデータベース事業である。

平成十一年の七月には、二十一代集と源氏物語（絵入）を公開し、CD-ROM出版したが、並行して進めているデータベース構築のうち、平成十一年度は「吾妻鏡」

が総仕上げの年に当たり、「栄花物語」及び四鏡の歴史物語データベースは、館外の十一名の研究者（監修員）のお世話になって進められる監修の年に当たった。初期入力としては、鈴鹿本の「古事記」と島根大学図書館蔵の「出雲国風土記抄」（四冊本と二冊本の二種）の本文テキストを入力した。

特に「吾妻鏡」は行間の仮名情報が多くあり、かつ、データベースの情報としては不十分で、作業は難航を極めたが、平成十二年中の公開に向けて、着実な進展を見ることができた。歴史物語の監修も順調に終わっていただき、「古事記」「出雲国風土記抄」の初期入力も、当初の予定通りに終了することができた。館内スタッフの努力も相当なものがあるが、館外の研究者の協力に負うところも極めて大きい。

平成三年度より構築を開始した古典人名データベースは、着実なデータの蓄積を見ているが、平成十一年度からは、肖像画データをも階層構造に加えるなど仕様を拡張し、年次情報の西暦データ付加などにより、年表情報への出力を可能にするなど、データベースの

応用レベルを拡張して、発展的に継続している。このうち、肖像画を中心とした部分は、すでにインターネットを通じて公開している。全容の公開に向けて精力的に取り組んでいるところである。

データベース利用案内は、目録データベース三本の無料化に伴い、実質的に大きく利用資格が拡張されたこともあって、使い始めるための説明を求めてくるなど、初歩的な質問が目立った。今も、毎週十本足らずの質問メールがその内容で届いている。

平成十一年十二月のシンポジウムコンピュータ国文学（第五回）は、二十一世紀の源氏物語研究というテーマの設定も功を奏し、広島大学から稲賀先生がインターネットに参加されるなど、新しい試みも興味を引いた可能性があるが、会場もほぼ満席で盛況であった。会場の外では、三種のCD-ROMがデモしており、直接吟味された方も多かつたようである。

今年度は、十二月八日の開催で、試験公開中の古典大系データベースの利用報告を軸にプログラムを予定している。詳しくは別に案内しているの、そちらを御覧いた

だきたい。

情報処理室

情報システムに関わる通常の運用・運転を除く平成十一年度の事業は、以下のように実施した。

(1) 第六期情報システムの仕様策定

平成十二年度に予定している情報システムのリリースに伴う政府調達のための仕様策定を開始した。官報公示による資料招請による仕様策定（案）を行った。続いて同意見招請を行い、仕様策定委員会によりほぼ最終案を決定した。平成十二年度末、導入見込みとなっている。

(2) 館内LANの調整

昨年度末導入した高速館内LAN（ATM）の調整および機能拡張等を行い、基幹通信速度100Mbpsによる情報インフラストラクチャの整備を行った。現在、安定稼働している。なお、平成十一年末、外部接続用通信回線（インターネット）の通信速度を1.5Mbpsから2Mbpsにあげた。(3) 電子資料館システムの実験 昨年度導入した電子資料館システムのの実証実験を開始した。多様

国文学データベースをメタデータに統合し、Z39.50等による国際標準の情報検索システムの適用可能性の実証実験を始めた。

三機関(当館、国際日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館)共同で、データベースの開発、利用等のコラボレーション実験を進めている。

(4) データベースの運用

従来、大型コンピュータ上で有料公開されているデータベース(マイクロ資料目録、和古書目録、研究論文目録)の無料化を実現した(平成十二年一月より)。一方、次期システムに合わせて大型コンピュータ上の多くのデータベースの分散化を進めている。

なお、科学研究費で進めている館蔵和古書(約七千冊)のページ画像のデジタル化が順調に進み、目録、テキスト、画像等のマルチメディアデータベースの実験が成功している。平成十二年度試験公開の準備を整えた。また、演能を中心とする動画データベースを研究し、プロトタイプシステムを立ち上げた。

(5) 日本古典文学本文データベース(実験版)の試験公開

岩波書店旧版「日本古典文学大系」全百巻のフルテキストデータベースの試験公開を開始した。正式名称は日本古典文学本文データベース(実験版)の試験公開としている。データベースは大型コンピュータに置かれていたが、インターネットによる利用を可能とした。取決めにより、平成十二年度末までの期限付公開である。

(6) 国際接続とコラボレーション

前年度に引き続き、英、米、仏、伊、独、伯国等から当館データベースへの国際接続実験を行った。また、共同研究の推進あるいはデータベースの構築等のためのコラボレーションシステムについての具体的な研究を開始した(主に、英、米、伊、仏)。

研究開発室

客員として加藤静子都留文科大教授、桜井陽子熊本大学助教授を迎えた。本年度はこのお二人に共通するテーマで開発計画を進め、国文学の世界で各ジャンルに共通の課題、テキスト諸本間に発生する異本関係の展開の仕組みをなんらかのデータベースとして構築できないものかという試みを探った。

加藤先生の研究課題である歴史物語諸本の展開、桜井先生の研究課題である軍記物語諸本の展開を軸とし、その他のジャンルの専門家に参加していただいて「汎諸本論データベース」開発に向けての研究会を開催した。この課題は、ジャンル毎の複雑な諸本異同の歴史を見据える必要がある、すぐにも実効性を持つものではないが、国文学データベースの可能性をこうした新しい試みから探ったことは有意義であった。

情報メディア室

野本忠司助教授が着任した。

整理閲覧部事業報告

整理 閲覧部

整理閲覧部では、資料の受入、整理、保存、利用サービス及び参考業務、公開講演会の開催、展示等の業務を行っているが、平成十一年度の当部の業務は次のとおりであった。

情報サービス室

①資料の受入

資料受入数についてみると、マイクロ資料は、ロールフィルム一、二三七リール、マイクロフロッピーディスク六六二枚、図書は、七、六五〇冊、逐次刊行物は、一、九〇二誌であった。その結果、平成十一年度末での全所蔵数は、別表のとおりとなった。

②マイクロ資料の整理

累積マイクロ資料目録データ約一六〇、〇〇〇件についての総点検を行った。

③ 図書資料の整理

活字本・影印本は、四、四四一冊、写本・版本は、五一七冊を整理した。

逐次刊行物は、三八二タイトルの受入、整理を行い、所蔵タイトルは、四、六〇二誌となった。

また、学術情報センター（現、国立情報学研究所）の「学術雑誌総合目録和文編」へのデータ提出のため、同センター目録システムへ三、九〇二タイトルのデータ入力作業を行った。

④ 活字本・影印本と逐次刊行物の目録システムの統合と遡及入力
活字本・影印本の目録システムと逐次刊行物目録システムをOPAC上での統合に伴い、六月よりOPACをリニューアルした。

遡及入力作業は、三、〇五八冊を入力した。その結果、活字本・影印本は、所蔵数の約四九パーセントが当館のOPAC及び学術情報センター目録システムから検索可能となった。

⑤ 古典籍総合目録作成事業

古典籍の総合所在目録データベ

ースを構築し公開することをめざし作業を継続している。

平成十一年度は、前年度に引き続き、古典籍総合目録データベースの一環として蓄積してきた古典作品典拠ファイルの総点検を行い、「国書総目録」からのデータ入力作業を完了させた。

また、データベース上の約一四、〇〇〇件の書誌データについて、著作及び著者を決定し、典拠ファイルとの関連付けを行った。

システム面では、研究情報部の協力による新システムの開発を継続して行った。

⑥ 閲覧業務
年間開室日数は、二二五日、来館利用者数は、七、七五一人（一日当たり三四・四人）、登録者数は、一、七〇三人（一日当たり七・六人）であった。閉架資料の閲覧点数は、二二、〇一六点（一日当たり九七・八点）であった。

また、文献複写は、二四、八二一件（一日当たり二一〇・三件）で、電子複写（リータプリンターを含む）二一五、五九一枚、紙焼写真一九、三一四枚、ポジフィルム二、一九三コマを作製した。

⑦ 相互利用

郵送による文献複写・相互貸借の受付は、複写二、〇五二件、貸借二四件一〇四冊であった。他機関への依頼は、複写二五〇件、貸借〇件であった。

⑧ 資料の保存

当館所蔵原本（写本・版本）のマイクロ化事業は、二四三点、約一三、五〇〇コマの撮影を実施した。保存用ネガフィルムの外部保管委託は、平成九年度収集分一、一九三リールを追加委託し、総計二九、〇三四リールとなった。また、映は、和古巻一三巻、明治本二二六巻を作成した。

なお、例年どおり、四月末から五月初めにかけて資料のくん蒸、年度末には蔵書点検を実施した。

参考室

① 参考業務

参考質問の受付・回答は四〇一件であった。

② 公開講演会

国文学の普及業務として、次のとおり公開講演会を開催した。

・第五十三回「劇化された軍記」（五月二十八日、当館）

「あの世からふりかえって見る戦物語」山中玲子氏（法政大学

能楽研究所助教授）

「義経の最期をめぐる物語―

「和泉が城」「高館」―小林健

二氏（大谷女子文学部教授）

「歴史―認識のドラマ―知盛

と実盛―原道生氏（明治大学

文学部教授）

・第五十四回「奥の細道」をめ

ぐって」（十月三十日、当館）

所蔵資料統計 (平成12年3月末現在)

資 料 種 別	点 数	冊 (リール) 数	
マイクロ資料	マイクロフィルム※	150,966点	32,958リール
	マイクロフィッシュ	16,119点	55,768枚
	紙焼写真本	—	64,752冊
図書 (古書及び新刊書)	42,627点	112,864冊	
逐次刊行物	4,602誌	—	
寄託資料	958点	4,307冊	

※他に紙焼写真による収集がある。

「自筆本『奥の細道』とはなにか」上野洋三（整理閲覧部長）
 「『奥の細道』の版本について」雲英末雄氏（早稲田大学文学部教授）

・臨時講演会（実践女子大学文学資料研究所と共催）「古典の未来—あるいは二十一世紀の古典学のために—」（十一月十二日）

「散佚文献のことなど—在ジユネーヴ日本文学関係資料の紹介を兼ねて—」小島孝之氏（東京大学大学院教授）

「天平時代の女性詩人」大岡信氏（詩人）

③ 展 示

○特別展示「芭蕉自筆『奥の細道』展」（十月二十五日～十一月六日）

○通常展示

・第七十三回「館蔵演劇資料展」（五月二十四日～六月二十五日）
 ・第七十四回「和書のさまざま」（二月十四日～三月二十四日）

○臨時展示

・夏期（解釈学会と共催）「江戸堂上派武家歌人の世界」（八月二十四日～二十六日）

・秋期（実践女子大学文学資料研究所と共催）「古典の未来—あ

るいは二十一世紀の古典学のために—」（十一月十一日～二十四日）
 ④ 講演集、展示図録の刊行

文庫紹介③③

大洲市立図書館（矢野玄道文庫）

公開講演会の講演録である「古典講演シリーズ」は、第四巻「歌謡—文学との交響—」と第五巻「伊勢と源氏—物語本文の受容—」

の二冊を刊行し、また、特別展示の図録として「奥の細道」の軌跡」を刊行した（いずれも臨川書店刊）。

幕末の平田派の国学者矢野玄道の蔵書を収蔵する。点数二〇〇〇余点、五〇〇冊を越す。末裔矢野茂雄氏が一括寄贈されたもので、概要は大洲市立図書館編「大洲市立図書館蔵矢野玄道文庫分類目録」（昭和四十八年）に詳しい。碩学玄道に相応しく蔵書は多岐に互るが、神祇・文学・歴史・地理・漢籍に分類される資料が多い。特に随筆・言語・地理・御伽草子・仮名字子・読本などに数多の貴重文献があることで名高い。貴重書の一端を示すと、玄道自筆本のほか、「春満遺稿」「雑話筆記」「耳塵鈔」「釈日本後紀私記」「日本逸史私記」「続日本後紀私記」「文徳天皇実録私記」「三代実録私記」「むらさきのひと」と、「いはてしのふ物語」「十訓抄私記」「古事談私記」「古語拾遺私記」「鴉鷺合戦

物語」「富士人穴草子」（慶長十二年写）などの写本、刊本「諸国靈場縁起集」「秋月物語」「二目玉鉾」「八幡の御本地」（承応二年刊）等々が挙げられる。国文学研究資料館が初めて調査に伺ったのは昭和四十九年初夏、現在、調査点数は蔵書の半数を越えた。

残っており、古典文学のみならず、幕末明治期の文学研究にとっても重要な資料群と言うべきである。平成十一年初夏、文庫へ伺った折、久保史朗館長先生（当時）はマイクロフィルム撮影を御許可下さり、晩秋には早速撮影について御高配賜わることとなった。平成十二年春、久保先生は退官された。坂本雅敏先生が新館長に就任され、先日、改めて調査撮影の御許可を賜わった。両先生に深謝申し上げたい。大洲市立図書館の所在は〒七九五―〇〇二 大洲市大洲六七八―一。電話〇八九三―二四一四四―九。JR伊予大洲駅よりタクシーで約十分、或いはバスで大洲本町下車。月曜日・月末・祝日・年末年始休館。

玄道は文政六年生、明治二十年没。松山の日下陶溪に入門、京都順正書院、江戸平田門、昌平塾に学ぶ。嘉永四年に上洛して国学を講じ、神祇伯白川家や吉田家の学頭を勤めた。明治三年、東京に転住、同十年、修史館御用掛を拝命。皇学所御用掛、宮内省御用掛、図書寮御用掛等を歴任、六国史校訂や史料収集に携わった。説話集を対象とした注釈書も著し、著作・手記等は二百数十点に及ぶ。矢野玄道文庫には明治期の文献も多数

（文献資料部 中野真麻理）

評議員

任期 平成12年7月1日～平成14年6月30日

朝尾直弘 京都橋女子大学文学部教授、京都大学名誉教授
阿部 謙也 共立女子大学長、一橋大学名誉教授
石毛直道 国立民族学博物館長
猪瀬 博 国立情報学研究所長、東京大学名誉教授
大口 勇次郎 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科教授
甲斐 睦朗 国立国語研究所長
河合 隼雄 国際日本文化研究センター所長、京都大学名誉教授
久保木 哲夫 都留文科大学長
久保田 淳 白百合女子大学文学部教授、東京大学名誉教授
興膳 宏 京都大学名誉教授
雜賀 美枝 ノートルダム清心女子大学長
坂元 弘直 東京国立博物館長
佐原 眞 国立歴史民俗博物館長
中野 三敏 福岡大学人文学部教授、九州大学名誉教授
田中 彰 北海道大学名誉教授
堤 精二 お茶の水女子大学名誉教授
徳江 元正 國學院大学文学部教授
進 實重彦 東京大学長
平岡 敏夫 筑波大学名誉教授、群馬県立女子大学名誉教授
吉原 健一郎 成城大学文学部教授

運営協議員

任期 平成12年8月1日～平成14年7月31日

伊井 春樹 大阪大学大学院文学研究科教授
岡崎 久司 大東急記念文庫学芸部長
後藤 祥子 日本女子大学文学部教授
高 荻利彦 学習院大学文学部教授
外村 南都子 白百合女子大学文学部教授
名和 修 (財) 陽明文庫長

延 廣 眞治 帝京大学文学部教授
野山 嘉正 放送大学教授
藤井 謙治 京都大学大学院文学研究科教授
宮地 正人 東京大学史料編纂所教授
共同研究委員会委員

共同研究委員会委員

任期 平成11年4月1日～平成13年3月31日

妹尾 好信 広島大学文学部助教授
野村 精一 実践女子大学名誉教授
富士 昭雄 駒澤大学文学部教授
松浦 友久 早稲田大学文学部教授
松尾 華江 宇都宮大学教育学部教授
三木 紀人 お茶の水女子大学教育学部教授
国文学文献資料収集計画委員会委員

任期 平成11年4月1日～平成13年3月31日

池宮 正治 琉球大学法文学部教授
江本 裕 大妻女子大学文学部教授
岡崎 久司 大東急記念文庫学芸部長
滝澤 貞夫 信州大学名誉教授
平野 由紀子 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科教授
任期 平成12年4月1日～平成14年3月31日
大橋 正叔 天理大学文学部教授
岸 雅裕 愛知文教大学国際文化学部教授
田中 登 関西大学文学部教授
身崎 壽 北海道大学大学院文学研究科教授
若木 太一 長崎大学環境科学部教授

国際日本文学研究会委員会委員

任期 平成12年4月1日～平成14年3月31日

今 関敏子 川村学園女子大学人間文化学部教授
木 越 治 金沢大学文学部教授
小池 正胤 東京学芸大学名誉教授

瀧 沼 誠二 北海道教育大学教育学部吉見沢校教授
中島 国彦 早稲田大学文学部教授
山口 博 聖徳大学人文学部教授
原本テキストデータベース委員会委員

任期 平成12年4月1日～平成14年3月31日

池上 洵一 神戸女子大学文学部教授
加納 重文 京都女子大学文学部教授
久保田 啓一 広島大学文学部助教授
小池 一行 宮内庁書陵部図書調査官
野村 精一 実践女子大学名誉教授
森 正人 熊本大学文学部教授
吉村 誠 山口大学教育学部教授
情報システム委員会委員

任期 平成12年4月1日～平成14年3月31日

安達 文夫 国立歴史民俗博物館情報資料研究部教授
伊井 春樹 大阪大学大学院文学研究科教授
石塚 英弘 図書館情報大学図書館情報学部教授
内田 保廣 共立女子大学文学部教授
杉田 繁治 国立民族学博物館民族学研究開発センター教授
長崎 健 中央大学文学部教授
永村 眞 日本女子大学文学部教授
中山 雅哉 東京七情報基盤センター助教授
根岸 正光 国立情報学研究所情報研究部研究科教授
原田 公子 国立国会図書館総務部副部長
星野 聰 京都大学名誉教授

古典籍総合目録委員会委員

任期 平成11年4月1日～平成13年3月31日

市古 夏生 お茶の水女子大学教育学部教授
加美 宏 同志社大学文学部教授
柴田 光彦 跡見学園女子大学文学部教授

高橋 柏 東京大学附属図書館事務部長
 堤 精二 お茶の水女子大学名誉教授
 益田 宗 国立歴史民俗博物館名誉教授
 横山 順子 国立国会図書館図書部古典籍課長
 国文学文獻資料調査員
 任期 平成12年4月1日～平成13年3月31日

〔北海道・東北地区〕

杉浦 清志 北海道教育大学教育学部副館長教授
 竹下 香織 山形女子短期大学助教授
 田中 初恵 宮城学院女子大学文学部非常勤講師
 中島 和歌子 北海道教育大学教育学部札幌校助教授
 寺島 恒世 山形大学教育学部助教授
 名子 喜久雄 山形大学教育学部助教授
 細田 季男 北海道札幌新川高等学校教諭
 吉見 孝夫 北海道教育大学教育学部札幌校教授
 〔関東地区〕
 青柳 隆志 東京成徳短期大学助教授
 井上 泰至 防衛大学校人間文化学科助教授
 越後 敬子 実践女子大学文学部助手
 大倉 浩 筑波大学文芸・言語学系助教授
 小西 淑子 淑徳大学国際コミュニケーション学部教授
 佐伯 孝弘 清泉女子大学文学部助教授
 島田 康行 筑波大学文芸・言語学系講師
 嶋 中道則 東京学芸大学教育学部助教授
 杉浦 晋 埼玉大学教養学部助教授
 杉本 和寛 東京芸術大学音楽学部助教授
 鈴木 俊幸 中央大学文学部助教授
 土屋 順子 大妻女子大学女子短期大学部非常勤講師
 十重田 裕一 早稲田大学文学部助教授
 中丸 宣明 山梨大学教育人間科学部助教授

〔中部地区〕

阿部 泰郎 名古屋大学大学院文学研究科教授
 有 働 裕 愛知教育大学教育学部助教授
 岡本 勝 愛知教育大学教育学部助教授
 加藤 洋介 愛知県立大学文学部助教授
 川村 裕子 新潟産業大学文学部助教授
 塩村 耕 名古屋大学大学院文学研究科助教授
 杉田 昌彦 静岡大学教育学部助教授
 田中 康二 富士フエニックス短期大学助教授
 玉城 司 清泉学院短期大学助教授
 戸谷 精三 長野工業高等専門学校校助教授
 服部 直子 金城学院大学非常勤講師
 服部 仁 同朋大学文学部助教授
 森澤 多美子 元都留文科大文学部非常勤講師
 柳沢 昌紀 中京大学文学部助教授
 和田 道子 中京大学教養部助教授
 〔近畿地区〕
 青木 稔 神戸松陰女子学院大学院文学部助教授
 安達 敬子 京都府立大学文学部助教授
 出原 隆俊 大阪大学大学院文学研究科助教授
 大島 薫 関西大学文学部助教授
 日下 幸男 大阪市立淀川商業高等学校教諭
 小林 一彦 京都産業大学日本文化研究所助教授
 小林 強 大阪国際女子短期大学非常勤講師
 須田 千里 京都大学総合人間学部助教授

〔中国・四国地区〕

赤松 万里 鳴門教育大学学校教育学部助教授
 飯倉 洋一 山口大学人文学部助教授
 稲田 秀雄 山口県立大学国際文化学部助教授
 樹下文 隆 広島女子大学国際文化学部助教授
 久保田 啓一 広島大学文学部助教授
 倉本 昭 梅光学院大学文学部講師
 下房 俊一 鳥取大学法文学部助教授
 杉本 好伸 安田女子大学文学部助教授
 竹村 信治 広島大学教育学部助教授
 西本 寮子 広島女子大学国際文化学部助教授
 長谷川 泰志 広島経済大学経済学部助教授
 広嶋 進 ノートルダム清心女子大学文学部助教授
 福田 安典 愛媛大学教育学部助教授
 藤沢 毅 広島文教女子大学人間科学部助教授
 古瀬 雅義 安田女子大学文学部助教授
 〔九州地区〕
 池田 幸恵 長崎大学環境科学部講師

藤 實久美子 国文学研究資料館史料科非常勤研究員
 宗 像和重 早稲田大学政治経済学部助教授
 山下 琢己 東京成徳短期大学助教授
 山中 玲子 法政大学能楽研究所助教授
 山本 和加子 元実践女子大学文学部非常勤講師
 近本 謙介 天理大学文学部助教授
 千本 英史 奈良女子大学大学院人間文化研究科助教授
 中西 健治 相愛大学人文学部助教授
 中前 正志 京都女子大学短期大学部助教授
 野口 隆 大阪学院大学経済学部講師
 原 雅子 金蘭短期大学助教授
 藤田 眞一 京都府立大学文学部助教授
 峯村 至津子 京都女子大学短期大学部講師
 森田 雅也 関西学院大学文学部助教授
 山本 和明 相愛女子短期大学助教授
 山本 登朗 光教女子大学文学部助教授
 林 原純生 神戸大学文学部助教授

井上洋子 福岡国際大学コミュニケーション学部助教
 今井明 福岡女子大学文学部教授
 上里賢一 琉球大学法文学部教授
 大久保順子 福岡女子大学文学部講師
 勝俣隆 長崎大学教育学部教授
 嘉手苺千鶴子 沖縄国際大学文学部教授
 黒木香 活水女子大学文学部助教
 國生雅子 筑紫女子大学文学部助教
 鈴木元 熊本県立大学文学部助教
 鈴木常彦 北九州大学文学部助教
 若木太一 長崎大学環境科学部教授
 国文学研究情報研究専門員
 任期 平成12年4月1日～平成13年3月31日

湯浅吉美 成田山仏教研究所嘱託
 横井孝 実践女子大学文学部教授
 原本テキストデータベース監修員
 任期 平成12年4月1日～平成13年3月31日
 青木周平 國學院大學文学部教授
 岩下武彦 中央大学文学部教授
 岩崎千鶴 お茶の水女子大学文教育学部教授
 神田典城 学習院女子大学国際文化交流学部教授
 共同研究員
 任期 平成12年4月1日～平成13年3月31日
 課題名 (岩瀬文庫書目録編纂のための基礎的研究)
 塩村耕 名古屋大学文学部研究科助教
 阿部泰郎 名古屋大学大学院文学研究科教授
 神原千鶴 名古屋大学大学院文学研究科助手
 服部仁 同朋大学文学部教授
 林知左子 愛知県西尾市教育委員会学芸員
 柳沢昌紀 中央大学文学部助教
 課題名 (關西大蔵 編纂のための脚本の所在調査と系統分類の研究)
 竹本幹夫 早稲田大学文学部教授
 石井倫子 日本女子大学文学部講師
 大谷節子 神戸女子大学文学部助教
 表きよし 国士館短期大学助教
 樹下文隆 広島女子大学国際文化学部助教
 山中玲子 法政大学能楽研究所助教
 課題名 (高僧伝の研究)
 堤邦彦 京都精華大学文学部教授
 後小路薫 別府大学文学部助教
 山下琢己 東成徳短期大学助教
 課題名 (国文学研究資料館寄託安永川藏資料による高僧伝の研究)
 福島和夫 上野学園日本音楽資料室長

磯水絵 二松学舎大学文学部教授
 宇都宮千都
 笠嶋忠幸 財団法人山光美術館学芸員
 高城弘一 國學院大學文学部助教
 課題名 (菅庵文庫の研究)
 藤田眞一 京都府立大学文学部教授
 飯倉洋一 山口大学文学部教授
 大谷俊太 奈良女子大学文学部助教
 神作研一 金城学院大学文学部助教
 山本和明 相愛女子短期大学助教
 任期 平成12年6月1日～平成13年3月31日
 課題名 (ブックロード―中日書籍交流のメカニズム―)
 大庭脩 皇學館大専長
 後藤昭雄 大阪大学大学院文学研究科教授
 田中隆昭 早稲田大学文学部教授
 戸川芳郎 二松学舎大学大学院文学研究科教授
 銭国紅 大妻女子大学比較文学部講師
 藏中しのぶ 大東文化大学外国語学部助教
 王敏 東京成徳大学文学部助教
 張競 明治大学法学部教授
 徳田武 明治大学法学部教授
 新川登亀男 早稲田大学文学部教授
 村井章介 東京大学大学院人文社会科学系研究科教授
 任期 平成12年7月1日～平成12年12月31日
 課題名 (近世後期の戯作研究)
 アダム・カバット 武蔵大学文学部教授
 新藤茂 国際洋世絵学会編集委員顧問
 鈴木俊幸 中央大学文学部教授
 棚橋正博 帝京大学文学部教授
 延廣眞治 帝京大学文学部教授

彙報

・委員会日誌・

平成12年

- 3月7日 ホームページ委員会
- 3月15日 ホームページ委員会
- 3月16日 図書選定小委員会
- 3月30日 図書資料委員会
- 4月6日 図書資料委員会
- 4月13日 大学院設置準備委員会
- 4月18日 ホームページ委員会
- 4月20日 大学院教育協力委員会
- 4月25日 移転問題検討委員会
- 4月27日 ホームページ委員会
- 5月9日 図書資料委員会
- 5月11日 館報紀要委員会
- 5月18日 ホームページ委員会
- 5月25日 大学院設置準備委員会
- 5月26日 国文学文献資料調査員会議(総会)
- 5月30日 共同研究委員会
- 6月2日 原本テキストデータ

・外国出張・

6月6日

図書選定小委員会

山下 則子

ロバート・キャンベル

期 間

平成12年2月13日
平成12年2月27日

移転問題検討委員会

・将来構想委員会

6月22日

ホームページ委員会

渡航先

イタリア・ドイツ

目 的

欧州における日本古

6月27日

移転問題検討委員会

目 的

欧州における日本古

目 的

文学交流史の研究

7月11日

移転問題検討委員会

期 間

平成12年1月19日

期 間

平成12年2月24日

・将来構想委員会

ホームページ委員会

和 田 恭 幸

渡航先

目 的

イタリア・ドイツ

8月1日

国際日本文学研究

目 的

欧州における日本古

目 的

第二次世界大戦期ア

館報紀要委員会

集会委員会

渡航先

フランス

目 的

フランス

・運営協議員会の開催について

平成十二年度第一回運営協議員

期 間

平成12年1月19日

期 間

平成12年2月27日

会が平成十二年六月二十九日(木)

に開催され、管理運営の概況、平

武 井 協 三

渡航先

目 的

フランス

成十一年度事業・研究報告、平成

十三年度概算要求等について協議

目 的

フランス国立東洋言

目 的

韓国を中心とした旧

が行われた。

・評議員会の開催について

平成十二年度第一回評議員会が

期 間

平成12年1月29日

期 間

平成12年3月1日

開催され、国文学研究資料館長の選

考、管理運営の概況、平成十一年

青 木 睦

渡航先

目 的

イギリス・ドイツ

度事業・研究報告、平成十三年度

概算要求等について協議が行われ

目 的

ベルギー・オランダ

目 的

チェコ・スイス

た。

・評議員会の開催について

平成十二年度第一回評議員会が

期 間

平成12年1月29日

期 間

平成12年3月4日

開催され、国文学研究資料館長の選

考、管理運営の概況、平成十一年

新 藤 協 三・浅 田 徹

渡航先

目 的

博志・中野真麻理

久保木秀夫 渡航先 目的 期間	アメリカ合衆国 イエール大学バイネ キ図書館における和 古書の調査 平成12年3月6日 平成12年3月23日	原 正一郎 渡航先 目的 期間	イギリス 国文学データを統合 利用するためのモデ ル論的研究 平成12年6月22日 平成12年7月1日	北村 啓子 渡航先 目的 期間	アメリカ合衆国 ACMハイパーテキ スト国際会議、AC Mデジタルライブラ リ国際会議に出席な らびにデジタルライ ブラリに関する研究 交流 平成12年5月29日 平成12年6月8日	大友 一雄 渡航先 目的 期間	台湾 台湾総督府文書調査 平成12年8月6日 平成12年8月10日	山崎 誠 渡航先 目的 期間	イギリス 自筆本画像データベ ースの研究 平成12年3月1日 平成12年3月8日	青木 睦 渡航先 目的 期間	台湾 台湾総督府文書の蒐 集と学際的研究のた めの台湾総督府文書 蒐集及び目録編纂 平成12年3月17日 平成12年3月24日	山下 則子 渡航先 目的 期間	イギリス 国文学に関する文献 浮世絵の調査・研究 平成12年9月1日 平成12年9月9日	鈴木 淳 渡航先 目的 期間	アメリカ合衆国 フリーア美術館所蔵 絵本等の調査 平成12年7月21日 平成12年7月29日	和田 恭幸 渡航先 目的 期間	台湾 日本古籍の調査お よび研究古活字版の 研究 平成12年6月14日 平成12年7月11日	渡航先 目的 期間	イギリス 家と綿密な研究打合 せを行い評価を受け る 平成12年3月11日 平成12年3月23日	渡航先 目的 期間	アメリカ合衆国 国際会議ICML 2000にて研究発 表及びオハイオ州立 大学の夏期セミナー (言語学)に参加 平成12年6月27日 平成12年7月9日	渡航先 目的 期間	台湾 台湾省文献委員会主 催「台湾文献史料整 理研究成果検討会」 における発表 平成12年8月12日	安永 尚志 渡航先 目的 期間	フランス・イギリス 国文学電子化テキス トの流通のための異 本同定プロトコルの 実証、評価のため、 共同研究者及び専門 渡辺 浩一 期間	在及び伝来に関する 調査と研究 平成12年3月1日 平成12年3月16日
--------------------------	---	--------------------------	--	--------------------------	--	--------------------------	--	-------------------------	--	-------------------------	---	--------------------------	--	-------------------------	--	--------------------------	---	-----------------	---	-----------------	---	-----------------	---	--------------------------	---	---



第6回 シンポジウム コンピュータ国文学

研究情報部データベース室
中村 康夫

今年の「シンポジウム・コンピュータ国文学」は、20世紀最後にあたる平成11・12年度限定で国文学研究資料館がネットワーク上に公開している《日本古典文学本文データベース》を取り上げます。この、岩波旧古典文学大系全百巻のデータベースを、各時代の研究者が実際に活用した上での研究発表をしてもらいます。

毎回好評のシンポジウムでは、21世紀の文学研究とコンピュータ環境を視野に入れて、この《日本古典文学本文データベース》の評価と、今後のデータベースの可能性をみなさんと考えていきたいと思ひます。つきましては、おもしろい使い方の実例や提案をお持ちの方は、ぜひ、データベース室（電子メールの場合は〔db@nijl.ac.jp〕中村康夫）までお知らせください。可能な限り、当日のプログラムの中で紹介したいと思ひます。

多数の方々の参加を、心よりお待ちしております。

なお、時代の趨勢としてのペーパーレス化に対応すべく、印刷物としての『講演集』は、今後はインターネットを通しての閲覧に移行していきたいと思ひます。ご理解とご協力のほどを、よろしくお願ひいたします。

日時・平成12年12月8日（金）10：00～17：00

参加・自由・無料

午前の部・10：00～11：40

午後の部・13：00～17：00

二十一世紀の文学研究とコンピュータ

—日本古典文学本文データベースの評価を通して—

基調講演 「日本古典文学本文データベース」安永尚志（国文学研究資料館）

講演

- ・上代：古事記・日本書紀 瀬間正之（上智大学）
- ・中古：枕草子・源氏物語 中村一夫（関西大学）
- ・中世：今昔物語集 渡辺信和（同朋大学仏教文化研究所）
- ・近世：近世散文 木越治（金沢大学）

シンポジウム 瀬間正之・中村一夫・渡辺信和・木越治

司会 伊藤鉄也（国文学研究資料館）・相田満（同）

ばあくれいざつき(最初の二週間)

原 正一郎

一九九九年六月一日、予定より一時間以上遅れてサンフランシスコ空港に着いた。六月にしては大雨だった。大荷物を抱えてサンフランシスコ市内のホテルに着いた時は、約束した時間の十分前だった。我々(自分とワイフ)を大学まで送ってくれる手はずになっていた。受け入れ先の教授との事前の打ち合わせでは、学生を迎えによこすとのことであった。時間びつたりフロントから迎えが来たとの電話がかかってきた。渡米前の三ヶ月は常識を逸した忙しさで、英会話学校などに通っている暇もなかった。まあ、学生とならばそれほど喋る必要もあるまいと、何の準備もなくフロントに下りてみると、教授ご自身がおられた。

サンフランシスコからバークレイに着くまで、滞在中のスケジュールに始まり、研究の進め方まで延々と質問責めにあった。寝不足と時差ボケも相まって地獄のような三十分であったが、今思い返すと、その後の十ヶ月を暗示する出来事だった。先ず、大学から紹介

されていたアパートへ向かった。バークレイヒルズと呼ばれる、山の斜面に別荘風の家が点在する地域の、如何にも山荘といった風情の家であった。想像していたよりも狭かったが、大学まで歩いて二十分程度、サンフランシスコ湾越しにサンフランシスコ市内、ゴールデンゲイトブリッジ、ベイブリッジ、マリンの山並みが見える眺望の良さ、電気・ガス・水道などのユーティリティが既に使える状態になっている上に料金は大家と折半、ということもあり即契約となった。住宅事情が逼迫しているバークレイで、到着早々にアパートが決まるのは珍しいことであらう。約一ヶ月後に日本からバークレイに来られた教授は、一ヶ月以上も家が見つからず大変なご苦労をされていた。それから大学に行き、教授のスタッフへの挨拶、仕事のためのブースの割り当て、パソコンの発注、研究室へ入るためのIDやセキュリティの解除・設定法の説明を受け、最後に書類の手続きを行った。私が所属

したの Institute of East Asia Studies の中の Japanese Studies であり、手続きは全てここで行った。その時、日本からの客員研究員は自分だけだったこともあり、教授から借りたブース(Dwinelle Hall)といって人文系の研究室が入っているビル)と Japanese Studies の一部屋(こちらは Fulton ストリートに面した別のビル)の二つの場所が使えることになった。アパートと大学の手続きが終わってしまったと、多少は心配していたが Social Security の取得や銀行口座の開設は、呆気ないほど簡単であった。運転免許証を除くと殆どの準備が終了してしまったので、翌々日から研究室通いが始まった。午前中は Japanese Studies で本を読んだり日本でやり残した仕事を片づけ、午後からは Dwinelle でコンピュータに向ってプログラムを作り、夕方になると工学部や理学部の図書館によって雑誌を読んだり本を借りて、六時頃に帰宅する、というパターンが十ヶ月続くこととなる。研究生活はほぼ順調な滑り出しであった。

さて初日にアパートの契約を終えたので、ホテルにいる必要はないと翌日には引越した。その日、

大家は我々に留守を頼んで二週間のヨーロッパ旅行に出かけてしまった。家具やタオルなどは全て揃っていたので、すぐに生活を始めたのであるが、洗濯機が無かった(大家は忘れていた)。これはワイフにとって大問題であった。大家は出かける前に洗濯機を注文し、それが来るまでは自分のランドリーを使うようにと家の鍵を貸してくれた。しかしハウスキーパーが来るので、ワイフは大家のランドリーをあまり使いたがらなかった。どこで食料が買えるのかも分からなかった。これは死活問題である。最初はサンフランシスコまで出かけたが、大学の近くで買い物をしていて、暫くして、日本の食材を売っているスーパーマーケットなどを教えてもらったが、速い上に荷物を抱えての山登りはきつく、一週間もしないうちに車を買うことになった。大家がいらない間、大家宛の電話を取り次いだり、電話回線やケーブルテレビの増設に来た業者に対応したり、大工や庭師の話し相手をしたりと、家庭生活の方は想像だに違った展開となった。このようにして、我々のアメリカ生活は始まった。

(研究情報部助教授)

人事異動（平成12年3月～平成12年8月）

【教官】

発令年月日	氏名	異動内容（教官職）	旧（現）官職
12. 3. 31	福田 千鶴	〔辞職〕 東京都立大学人文学部助教授	史料館助手
12. 4. 1	ロバート キャンベル	〔転出〕 東京大学大学院総合文化研究科助教授	文献資料部助教授
12. 4. 1	齋藤 希史	〔転入〕 文献資料部助教授	奈良女子大学文学部助教授
12. 4. 1	五島 敏芳	〔採用〕 史料館助手	学習院大学大学院人文科学研究科博士後期課程 (明治大学文学部教授)
〃	原 道生	文献資料部客員教授 (13.3.31まで)	(跡見学園女子大学文学部教授)
〃	神野藤昭夫	研究情報部客員教授 (13.3.31まで)	(駿河台大学大学院文化情報学研究所教授)
〃	広瀬 順晴	史料館客員教授 (13.3.31まで)	
〃	山本 良	文献資料部非常勤研究員 (13.3.31まで)	
〃	安道百合子	研究情報部非常勤研究員 (13.3.31まで)	
〃	副田 恵	整理閲覧部非常勤研究員 (13.3.31まで)	
〃	藤實久美子	史料館非常勤研究員 (13.3.31まで)	
12. 4. 1	大谷 俊太	〔併任等〕 文献資料部助教授 (12.9.30まで)	(奈良女子大学文学部助教授)
〃	辛島 正雄	研究情報部助教授 (13.3.31まで)	(九州大学大学院人文科学研究科助教授)
〃	二井 仁美	史料館助教授 (13.3.31まで)	(大阪教育大学教育学部助教授)
12. 4. 1	王 勇	〔外国人研究員〕 文献資料部客員教授 (13.3.31まで)	(浙江大学日本文化研究所長、教授)
12. 4. 25	カン アダム	文献資料部客員助教授 (12.12.31まで)	(ワシントン大学助教授)

【事務系職員】

発令年月日	氏名	異動内容（教官職）	旧（現）官職
12. 4. 1	安島 民夫	〔転出〕 茨城大学総務部人事課長	管理部庶務課長
〃	市川 修	東京学芸大学附属図書館情報サービス課長	整理閲覧部情報サービス室長
〃	小楢山克則	東京大学経理部契約課契約掛長	管理部会計課経理係長
〃	野口真理子	東京大学経済学部・経済学研究科和査掛長	情報サービス室情報管理係長
〃	石井 肇雄	東京大学工学系研究科等学術協力課共同利用掛員	管理部会計課用度係員
12. 4. 1	酒井 和博	〔転入〕 管理部庶務課長	東京大学研究協力部留学生課長
〃	田村 正夫	整理閲覧部情報サービス室長	弘前大学附属図書館情報サービス課長
〃	中井 雪子	整理閲覧部情報サービス室情報管理係長	宇宙科学研究所管理部庶務課情報資料係長
〃	篠崎 勲	管理部会計課総務係員	東京大学物性研究所経理課用度掛員
12. 4. 1	伊藤 陽子	〔館内異動〕 管理部会計課経理係長	管理部会計課経理係経理主任
〃	佐野 一良	管理部会計課管財係管財主任	管理部会計課管財係員
〃	岩崎 光二	管理部会計課情報処理係情報処理主任	管理部庶務課庶務係員
〃	尾迫 雅英	管理部会計課用度係用度主任	管理部会計課総務係総務主任
〃	佐藤 崇	管理部庶務課庶務係員	管理部会計課情報処理係員
〃	野田 佳孝	管理部会計課総務係員	管理部会計課用度係員
〃	神谷 真司	管理部会計課経理係員	管理部会計課総務係員

利用者へのお知らせ

◆参考開架圖書の配置換えについて

閲覧室の参考開架圖書は、従来、主題分類順に排架していましたが、平成十二年四月より、原則として請求記号順に並べ換えました。これは、目録で検索して参考開架図書だと判明しても書架のどのあたりにあるのかわからないという不便さを解消するために行ったものです。

具体的には、国語辞典の類（請求記号ミ）を先頭に置き、その後は総記（請求記号ノ）、日本文学（請求記号イ、キ、シ、チ、ニ、ヒ）、日本史（請求記号ウ、ク、ス、ツ、ヌ、フ）、地理・民俗（請求記号ム）、日本思想（請求記号エ、ケ、セ、テ、ネ、ヘ）、芸術・芸能（請求記号メ）、外国文学（請求記号オ）、外国語（請求記号コ）、外国史（請求記号ソ）、外国思想・思想一般（請求記号ト）、社会科学（請求記号ホ）、自然科学・産業（請求記号モ）、大型本・極小本（請求記号リ、ル、レ、ロ）の順に、同一請求記号内は数字の順に並べてあります。詳しくはカウンターでお尋ねください。

◆ILLへの参加について

平成十二年四月より、国立情報学研究所（旧学術情報センター）のILLシステムに参加しました。これにより、所属の図書館を通しての利用がより迅速になりました。四月以降当館では、文献複写、相互貸借とも受付件数が倍増しています。

◆新指定の貴重書、特別コレクション

次の資料が新たに貴重書と特別コレクションに指定されました。これにより、貴重書は九十三点、特別コレクションは八コレクションとなりました。

また、平成八年度に特別コレクションに指定された「臼杵藩吉田家歴代詩文」（写・三十一軸）に五軸が追加指定され、計三十六軸となりました。

〈貴重書〉

- ・ 行相法教誡新学比丘護律儀（写・一冊）
- ・ 阿弥陀胸割（刊・一冊）
- ・ 徒然草（刊・二冊、慶長期刊古活字版）
- ・ 古今操便覧（刊・二冊）
- ・ 芭蕉書簡「早春仏頂云々」（写・一軸）

〈特別コレクション〉

- ・ 日本漢詩文集コレクション（中村真一郎氏旧蔵）八三一点二、一八一冊
- ◆「マイクロ資料目録縮刷版」の市販について

「マイクロ資料目録」は、発行部数に限りがあり、一部の機関にしか配布できないのが現状です。そこで、縮刷版を別途刊行し市販してきました。このたび第二十二冊目の「マイクロ資料目録一九九九年」が刊行されました。（笠間書院刊。定価七、五〇〇円）

なお、当館では目下、諸事業の電子化を進めており、「マイクロ資料目録」も電子媒体での情報提供を検討中です。それに切り換えた時点で、冊子の目録は廃止することになります。

◆特別展示図録の市販について

今年度の特別展示として平塚市・隆盛寺所蔵資料による「元政―弱者の奇蹟―」が、六月十九日から三十日まで開催されました。展覧資料全九二点の解説と墨蹟資料の翻字を収録した特別展示図録「元政―弱者の奇蹟―」が二チレン出版より刊行されています。

ご希望の方は発行所までお問い合わせください。（ニチレン出版、電話〇三―三九三八―五三四七。定価一、〇〇〇円）

◆「古典講演シリーズ」刊行のご案内

このたび「古典講演シリーズ5」として「伊勢と源氏―物語本文の受容―」が刊行されましたのでご案内します。

本書には、当館主催の公開講演会の講演録を中心に、次の五編が収録されています。

- ・ 鉄心斎文庫の伊勢物語コレクション
- ・ 山本登朗
- ・ 「伊勢物語」の本文と「伊勢物語」の享受 片桐洋一
- ・ 源氏物語の本文とは何か 伊井春樹
- ・ 宇治の中君 岩佐美代子
- ・ 「源氏物語」受容環境の変革―古典文学のデータベース化について― 伊藤鉄也
- ・ なお、これまで刊行された「古典講演シリーズ」（臨川書店刊）は次のとおりです。
- ①「万葉集の諸問題」
- ②「詩人杉浦梅潭とその時代」
- ③「商売繁昌―江戸文学と稼業―」
- ④「歌謡―文学との交響―」

平成12年度 秋季学会

①事務局 ②開催日 ③会場
(詳細は当館ホームページ参照)

- 歌舞伎学会 ①〒169-8050 新宿区西早稲田1-6-1 早稲田大学演劇博物館内 03-3203-4141内線71-5936 (月曜
午後のみ) ②12月9・10日 ③聖学院大学
- 訓点語学会 ①〒155-0032 世田谷区代沢1-20-10 fax03-3487-4891 ②10月27日 ③安田女子大学
- 計量国語学会 ①〒167-8585 杉並区善福寺2 東京女子大学3号館3118号室内 03-3395-1211内線2339
②9月30日 ③東京女子大学
- 国語学会 ①〒113-0033 文京区本郷7-3-1 東京大学文学部国語研究室内 03-3812-2111 事務取扱 〒113-
0033 文京区本郷1-13-7 日吉ハイツ404 03-5802-0615 ②10月28・29日 ③安田女子大学
- 上代文学会 ①〒156-8550 世田谷区桜上水3-25-40 日本大学文理学部国文学研究室内 03-3329-1151(代)
②11月11・12日 ③日本大学法学部(水道橋)ほか
- 昭和文学会 ①〒101-0064 千代田区猿楽町2-2-5 笠間書院内 03-3295-1331 ②11月11日 ③花園大学
- 全国大学国語教育学会 ①〒657-8501 神戸市灘区鶴甲3-11 神戸大学発達科学部内 078-803-7718
②10月14・15日 ③山形大学
- 全国大学国語国文学会 ①〒101-0064 千代田区猿楽町1-3-1 (株)おうふう気付 03-3294-0857
②10月14～16日 ③甲南女子大学(中古と合同)
- 中古文学会 ①〒214-8580 川崎市多摩区東三田2-1-1 専修大学文学部国文学科研究室内 044-911-1230
②10月14～16日 ③甲南女子大学(全国大学と合同)
- 中世文学会 ①〒305-8571 つくば市天王台1-1-1 筑波大学文芸・言語学系犬井研究室内 0298-53-4126
②10月28～30日 ③皇學館大学
- 日本演劇学会 ①〒194-8610 町田市玉川学園6-1-1 玉川大学文学部芸術学科演劇研究室内 fax042-739-8092
②10月28・29日 ③関西学院大学
- 日本音声学会 ①〒113-8622 文京区本駒込5-16-9 日本学会事務センター 03-5814-5801
②9月30日・10月1日 ③麗澤大学
- 日本歌謡学会 ①〒658-8501 神戸市東灘区岡本8-9-1 甲南大学10号館904号宮岡研究室内 078-431-4341(代)
②10月7・8日 ③金沢市文化ホール
- 日本近世文学会 ①〒101-8301 千代田区神田駿河台1-1 明治大学文学部原道生研究室内 03-3296-4545
fax03-3296-4349 ②10月28・29日 ③高知城ホール
- 日本近代文学会 ①〒259-1292 平塚市北金目1117 東海大学文学部日本文学科第2研究室内 0463-50-2196
事務取扱 〒113-8622 文京区本駒込5-16-9 学会センターC21 日本学会事務センター内 03-5814-
5810 ②10月21・22日 ③実践女子大学
- 日本語学会 ①〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入 075-415-3661 ②11月25・26日 ③名古屋学院大学
- 社団法人日本語教育学会 ①〒101-0065 千代田区西神田2-4-1 東方学会新館 03-3262-4291
②10月7・8日 ③名古屋外国語大学
- 日本児童文学学会 ①〒567-8578 茨木市宿久庄2-19-5 梅花女子大学谷悦子研究室気付 0726-43-6221(代)
fax0726-43-7997 ②10月14～16日 ③愛知県立大学
- 日本文学協会 ①〒170-0005 豊島区南大塚2-17-10 03-3941-2740 ②11月18・19日 ③東京学芸大学
- 日本文学風土学会 ①〒102-8336 千代田区三番町6 二松学舎大学文学部国文学科研究室 03-3261-7406
②11月11日 ③専修大学神田校舎
- 日本文体論学会 ①〒110-0004 台東区下谷1-5-34三修社内 03-3842-1711 ②11月24・25日 ③神戸女学院大学
- 日本方言研究会 ①連絡先1 〒192-0397 八王子市南大沢1-1 東京都立大学国語研究室内日本方言研究会幹
事 0426-77-2135 連絡先2 〒115-8620 北区西ヶ丘3-9-14 国立国語研究所気付日本方言研究会幹
事 03-5993-7630 ②10月27日 ③安田女子大学
- 俳文学会 ①〒184-8501 小金井市貫井北町4-1-1 東京学芸大学教育学部言語文学第一学科嶋中道則研究室内
042-329-7243 ②10月21～23日 ③愛知教育大学
- 萬葉学会 ①〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学文学部国語・国文学研究室内 06-6605-2413、
2414 ②10月14～17日 ③香川大学ほか
- 紫式部学会 ①〒230-0063 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 鶴見大学文学部日本文学科研究室内 045-581-1001内線242
②12月2日 ③学習院大学
- 和歌文学会 ①〒192-0393 八王子市東中野742-1 中央大学文学部国文学研究室内 0426-74-3789
②10月6～8日 ③中央大学駿河台記念館
- 和漢比較文学会 ①〒228-8533 相模原市文京2-1-1 相模女子大学国文学科矢作研究室内 042-742-1411
②9月23～25日 ③信州大学